

P07

上顎犬歯が正常位置より埋伏に至り牽引を行った症例

○平野慶子, 岡崎好秀, 松村誠士*, 仲野道代* (岡大・医病・小児歯, *岡大・大学院・行動小児歯)

【目的】小児歯科では低年齢時から口腔の定期検診を行っているため異所萌出や埋伏を早期に診断可能であることが多い。今回永久歯胚の位置異常が認められなかったが4年後に $\bar{3}$ の歯胚位置異常を認め、咬合誘導を行った症例について報告する

【症例】初診時2歳7か月。齲蝕処置を希望して来院。既往歴は特記事項なし。齲蝕治療を終了し、定期健診にて通院していた。8歳5か月時にパノラマエックス線写真を撮影したが異常は認めなかった。しかし12歳11か月時に \bar{C} が残存し動揺も認めなかったため再びパノラマエックス線写真を撮影したところ、 $\bar{3}$ が水平埋伏に至っていた。

牽引可能と診断し、開窓を行い直ちに牽引を開始した。

\bar{C} は保険のため保存しフック付きナンスのホールディングアーチとスレッドにて $\bar{3}$ の牽引を行った。13歳6か月時には反時計周り方向に30°の歯軸の改善を認めたその後14歳0か月までに上下的な移動が3.5mm、角度が7°とわずかであったため下顎のリンガルアーチで顎間牽引を行った。

その後さらに移動の効果を得るため上顎にマルチブラケット装置を装着し、 $\bar{4}$ $\bar{5}$ $\bar{6}$ を結紮して $\bar{3}$ を牽引した \bar{C} にもスレッドをかけて2方向から牽引を行ったところ、15歳1か月には下方移動開始した。16歳11か月には $\bar{3}$ の歯冠がほぼ露出し尖頭が隣在歯歯頸部付近まで移動してきたために、17歳11か月に拡大装置を用いて上顎臼歯部の拡大を行った後アーチワイヤーで $\bar{3}$ を歯列中に入れ、19歳11か月にマルチブラケットを除去し、上下顎にリテーナーを装着した。

【考察】平田らによると、今回の症例のような近心埋伏型は犬歯の埋伏型のうち11.5%を占めるとされ隣在歯根に影響がない場合には放置される場合が多いとされている。しかし本症例のように早期に埋伏が診断された場合には保存する価値があると考えられる。

【文献】

大田義之：埋伏歯の臨床，医歯薬出版，東京，1998，32-39.

P08

オトガイ孔に近接した $\bar{5}$ 埋伏歯を萌出誘導した顎変形を伴った開咬の長期支援

○西川哲太, 大野陽真, 宮本理恵, 宮本茂広, 大野秀夫

(医)おおの小児矯正歯科 (下関市)

【はじめに】初診時10歳0か月の女兒。オトガイ孔に近接した $\bar{5}$ および \bar{E} の埋伏歯を認めたため、 $\bar{5}$ の萌出誘導を行った。12歳8か月より顎変形を伴った開咬に対する咬合誘導を行った。成育医療的視点から約8年7か月長期支援を行ったので報告する。

【症例および経過】1. $\bar{5}$ \bar{E} 埋伏歯の対応(10歳0か月～12歳8か月):症例は初診時、 \bar{E} は歯冠のみで遠心傾斜。 $\bar{5}$ は歯根が1/3程度完成していたものの、 \bar{E} の遠心下方に埋伏、 $\bar{4}$ と $\bar{6}$ のspaceは3mm程度であった。 $\bar{5}$ \bar{E} の抜歯を口腔外科に依頼したところ、術野のspaceがないことならびに $\bar{5}$ がオトガイ孔に近接していたため、 $\bar{5}$ の抜歯はできないとの回答をうけた。そこで、まず \bar{E} を抜歯するために咬合誘導的手段を用いて $\bar{4}$ と $\bar{6}$ のspace regainingを行い $\bar{5}$ の萌出を誘導した。2.顎変形を伴った開咬に対する対応(12歳8か月～15歳10か月): $\bar{5}$ 萌出誘導終了後、顎変形を伴った開咬に対する患者の治療希望が出現した。外科矯正の適応と考えられたものの、外科矯正の希望がなかったため保存的な不正咬合治療を行った。

3.動的治療終了以降(15歳10か月～現在):保定管理中。定期的支援を継続している。

【まとめ】本症例は2011年7月現在、8年7か月と長期にわたり支援を行った。当院初診時は $\bar{5}$ \bar{E} の前医の処置対応から医療不信感を持ち、当院の説明になかなか同意を示さなかった。しかし、定期的に検査およびカウンセリングを行い、また患者の生き方、考え方および医療ニーズを尊重することで、患者および両親が納得したことで満足した医療行為につながった。